

COBALT-SERIES

1/2・フシギの七日間

—藤木杏子



集英社文庫

いっとうぎ・ようこ

本名・渡辺かおり。1962年2月17日、横浜生まれ。水瓶座。AB型。'83年第1回コバルト・ノベル大賞に『たとえば、十九の時のアルバムに』が佳作入選。趣味はニューミュージック、旅行、アニメ、英会話。著書に『くどき上手なピーターパン』『ラスト・シーンではほえんで』『ファースト・シーンはろまんていっく』『恋のむこうにオフロード』『恋のルートをかけぬけて』『風色ロマンスごいっしょに』『エンドマークは乙女ちっく』『えびろーぐはファーストKISS』がある。



1/2・フシギの七日間

COBALT-SERIES

1990年4月30日 第1刷発行

1992年4月15日 第4刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著 者 一 藤 木 杏 子

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
会 社

〒101-50

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

(3230) 6 2 6 8 (編集)

電話 東京 (3230) 6 3 9 3 (販売)

(3230) 6 0 8 0 (製作)

印刷所 凸版印刷株式会社

© YÔKO ITTÔGI 1990

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611416-X C0193



COBALT-SERIES

^{ハーフ}
 $\frac{1}{2}$ ・フシギの七日間

— 藤木 杳子

集英社文庫

12.ウシギの七日間



「あはしは、あなたなのよ。
あえて言うなら、わたしの夢の故郷」

と微かに光る。ル　　つなぐ。

「流花はね、本当はもっともっと、
いろんなことがわかるのよ。
かわりさえしなければね。」



いきなり、開け放った窓から、ものすごい風！
部屋いっぱい、散り急ぐ桜の花びらが舞い狂う。

「待って——いかないで——」

目次

^ハ₁^フ 1/2・フシギの七日間

I	ため息の首飾り……………	10
II	桜の下に立っていた、彼女……………	45
III	金の陽光、銀の羽根……………	90
IV	スーパーガールの危機!?……………	128
V	エキサイティング・ナイト、そして……………	156
エピソード……………		214
あとがき——おしゃべり通信Ⅱ……………		219

イラスト／田村みゆき

1/2^ハ_フ
・
フ
シ
ギ
の
七
日
間

I ため息の首飾り

1

春の陽^ひざしがあたたかな、校舎の渡り廊下。

高二の春。新しい学年の、新しい学期。

クラスがえを発表する掲示板。その前で、あたしは名前の書きつけられた大きな白い紙を、じっと見つめていた。

まわりでは、まるで蜂^{はち}の巣をつついたような騒ぎ。

あちこちで、

——やった！ 同じ組！

とか、

——やだあ、ばらばらじゃないのっ。

とか、にぎやかな喚^{かん}聲^{せい}があがってる。

それを耳にしながら、唇にひとさし指をあてて自分の名をさがす。

えーと、神代流花は……あつた！ 二年A組だわ。

自分のクラスがわかると、今度は同じ組の中に友達をさがしていく。

新学期、クラスが変わるごとに味わうスリリングなひととき。

ほら、誰が同じクラスのメンバーになるか、というのは大きな問題でしょ？

真由子と、いっしょだといいなあ……。

なんて考えながら、掲示板に首をのばしていたら。

誰かにぼん、と肩をたたかれて、あたしはふりかえった。

「流花！」

名を呼んで笑いかけてきたのは、ちょうど同じクラスの中に名前をさがしていた篠田真由子

——中学の時の親友なの。

「やったね！ いっしょのクラスよ」

「ホントっ？ ラッキー♡」

シヨートヘアを揺らし、だきつかんばかりにしてくる真由子に、あたしも安堵して笑いかえす。

よかった♡ これでまた真由子と同じクラスですごせるのね。

「他の連中は見た？」

「ううん、まだ途中」

首を横にふるあたしに、真由子、情報提供してくれる。

「あとさ、中禅寺^{ちゅうぜんじ}くんも同じなのよ」

「慎吾^{しんご}くんも？」

中禅寺さんちの慎吾くんは、あたしのふたいとこ。ちょっと——かなり、ごっつい、のっばの男の子。

「それに、なんと野沢^{のざわ}逸美^{いつみ}もいっしょなのよね」

真由子の口からこぼれたその名に、あたしはぎよっとする。

「……野沢さんも？」

うん、とうなずいて肩をすくめてみせる真由子。

「因縁^{いんねん}だわねえ、流花」

「……………」

真由子のもたらししてくれた情報に、あたしは、はあ、とため息をついた。

どうも苦手なんだ、野沢さんって。どういうわけか、敵意燃やされていて。

と、そんなブルーな気分にはたっている。

「きゃっ」

混雑したクラス発表の掲示板の前、ひとに押されて、思わずよろけてしまう。

「流花っ！」

ぐらつとするあたしに、真由子のあせった声がとぶ。

ちょうど階段ぎわに立っていたから、たまらない。バランスをくずし、体が宙になげだされてしまう。

あたしは、ぎゅっと眼をつむった。

このままでは、もろに階段を落ちるっ！

数秒の空白のあと、ずしんという衝撃^{しやうげき}。

でも、それは床にたたきつけられる感触じゃなかった。床よりは、はるかに心地よい——ひとの感触。

きつくつむっていた眼を、おそるおそる開ける。

と、そこにあった姿は。

「——慎吾くん！」

今さっき話題にのぼっていた——のっぽの、ごっつい男の子。

その慎吾くんが階段の下で、あたしを受けとめてくれたの。

「大丈夫か？」

軽々とあたしを抱きかかえたまま、聞いてくる。

「あ、うん。どうもありがとう」

「驚いたぞ。クラスがえの発表見に来たら、流花がふってくるんだからな。あいかわらず、ぽ

けっとしてるんだな」

……あいからわず、ぼけっとしてるなんて、ひどいっ……。

ひそかにそう思いつつも、助けてもらったので抗議はやめておく。

ふたいとこの慎吾くんは、十六にしてすでに身長一八三。一五三からいっこうに伸びないあたしと並ぶと、ほとんどデコボココンビ。

幼少より武芸マニアのおじーちゃんに鍛えられ、趣味は座禅と瞑想。ついたあだ名が「若年寄り」というお寺の息子なの。

「流花！」

真由子があわてて階段を駆けおりてきて、あたしたちのかたわらで立ち止まる。

「ああ、よかった。どーなるかと思ったわ」

そこまで言って、小首をかたむける真由子。

「……そーしてると、なかなかロマンティックねっ。お姫さまと騎士って感じでさ」
「は？」

慎吾くんとあたし、ふたりして同時に、ちょっと間のぬけた声を出す。

あたしたちが……ロマンティック？

まっさかあ。

でも、ふと階段の上を見ると。

きやつ、みんな興味シンシンでこっちに注目してるじゃないの。

「よっ、いいぞ」

頭上から、歓声^{かんせい}やヤジまで飛んできて、あたしは真っ赤になってしまう。

「あ、あの、慎吾くん、おろして」

「ああ、そうだな」

まわりの注目やヤジなぞ気にもとめずに。慎吾くん、いたって冷静にあたしをすとおろしてくれる（ちなみに慎吾くんは、若年寄りの他に、朴念仁^{ぼくねんじん}とも呼ばれているの……）。

その場の妙な雰囲気^{ふくけい}をフォローするように、口を開いたのは真由子。

「あ、そうだ、中禅寺くん、今年もあたしたち三人、同じクラスよっ。2ーA」

その情報に、慎吾くん、あたしたちにむかって武骨^{ぶこつ}に笑う。

「今年も同じか。ほとんどくされ縁^{ゆかり}だな。ま、よろしくな」

「ううん、こちらこそ」

肩をすくめて笑う真由子とあたし。

その時。

階段の上からふときつい視線を感じて、あたしはふりあおいだ。

あちゃ。視線は野沢さん——野沢逸美^{のざ いたみ}から。

慎吾くんと話してるあたしたちを、ほとんど、にらみつけるように見つめている。